

# 服装社会学と社会学（2）

濱 田 勝 宏\*

## Fashion Sociology and Sociology（2）

Katsuhiko Hamada

**要 旨** 前稿「服装社会学と社会学（1）」において、服装社会学の成立とその研究領域の拡大について述べた。具体的には、「服装」概念の中に、服装それ自体が人間の行動、社会関係、心理と文化、そして経済的行為など社会的ないし社会学的意味を含んでいるものとした先駆者達が、ひとまず服装を社会学的視点から捉える学としての「服装社会学」の必要性を説いたことについてふれた。そして、服装社会学は、社会学的視座を積極的に採用することによって四領域を設定することとなり、服装に関する社会科学という展開を余儀なくされるものとなったことを振り返った。同時に、背後には教育・研究体制の整備が比較的早く進んだこと、また、研究者集団の組織化と研究成果の発信メディアの形成が図られたことも確認した。これら服装社会学研究の成立過程に大きく関わったのは、荻村昭典教授である。本稿では、荻村の服装社会学の形成にみられた模索の状況を振り返るとともに、荻村の主張・提唱に含まれる服装社会学の発展性、特に社会学を中心においた隣接領域との関わりと方法論の必要性などについてふれる。

キーワード 服装社会学 (fashion sociology) 大衆社会 (mass society) パーソナリティ (personality)

### I はじめに

前稿「服装社会学と社会学（1）」において、服装社会学の成立について述べるとともに、服装社会学と社会学の関係について、初期段階でのその推移に重点をおいて振り返った。同時に、服装社会学それ自体の研究・教育領域について、その展開をみるとともに、服装社会学の四領域の設定ということについて基本的な考えを整理することとした。その結果、四領域は、社会学的領域、文化人類学的領域、心理学的領域、経済学・経営学的領域として措定されるとともに、その領域は、各領域間の相互関係を濃厚にし、

服装社会学は、服装やファッション現象に関する社会科学研究を意味するものであることを確認した。そして、その一方で、服装社会学における社会学の占める意味、服装社会学と社会学の密なる相互関係は依然として変わらぬものがあり、それは暫定的に「狭義の服装社会学」と位置づけられるものという見解にたつた。本稿では、狭義の服装社会学と捉えられる「社会学的な服装社会学」の研究の関心の広がりについて、ひとまず初期段階に戻って考察してみた。

「狭義の服装社会学」（以下、特に断らない限り服装社会学と記述する。社会科学的な広がり前提とする服装社会学について述べる場合は、広義の服装社会学と記すこととする）は、草創期のリーダーであった荻村昭典教授の提唱

---

\* 本学教授 服装社会学

した研究的関心とその社会学的視野に依るものであった。そして当初、現代社会の構造的変化を根底に見据える社会学と服装、衣生活、流行現象などとの関係について論述することに中心がおかれたので、服装社会学はマクロな社会学との関連を色濃くするものであったと言ってよい。その後、荻村は現代社会（とりわけ大衆社会化状況）と現代人の心理傾向や行動特性と服装との関係にも注目するようになる。それは、当時、アメリカで盛んであった社会心理学、特に社会的性格、マス・コミュニケーションと現代人の思考と行動との関連、大衆社会化状況における集団帰属意識や孤立化などといった研究動向を応用するものであった。とりわけ大衆化しつつあったファッション、ひいては大衆消費の波にもまれる衣生活を捉えるとき、現代人と服装や流行現象との関係にアプローチする必要性が生じていた。そのようなプロセスは、心理学や社会心理学の理論や方法を導入することにつながり、マクロな社会学を一方に捉えながら、他方でミクロな社会学への連結となったと言ってよい。いましばらく、荻村の服装社会学の形成のプロセスをふり返ることとしたい。そして、その結果、服装社会学が他の三領域にどのように架橋を設定するべく試みたか考察したい。

## II 服装への社会学的接近

繰り返すが荻村は、その服装社会学を構築する基本に社会学を設定した。但し、社会学は、特に1960年代初期の日本の社会学は、より広範に研究領域を広げつつあり、細分化傾向を強めていた。すなわち、いわゆる領域社会学の拡大が進む一方で、その整備がなされ研究課題も細分化をみせていた。研究方法をめぐっても、多様化が進み、理論的にも欧米のさまざまな潮流が上陸していた時期であった。同時に、日本社会学会を中心とした「社会学辞典」の編集、また、各研究者集団による社会学諸領域を俯瞰する講座類の刊行など、社会学を体系化する作業が活発な時代でもあった。その中にあって、

荻村は社会学の動向を見据えながら、服装社会学の方向性について模索していたと思われる。そして、服装学研究の多様性と学際性からみて、服装社会学を旧来の社会学の中で、領域社会学のひとつとして確立させるという考え方に立つべきではないと考えていた。この点は、その後の服装社会学の展開に柔軟性を与え、多方面、諸領域の人々が研究に参画することを可能にするものであった点で、重要な意味をもつ。

しかし、一方で当時は、農村ないし村落の社会学の視点を基盤にして社会・文化を把える戦前・戦後期の日本社会学の特性がまだ色濃く残っており、その潮流の中で育った社会学者は少なくなかった。従って、農村・村落、都市社会学からスタートした戦後第一世代の社会学者達は、その多くの人々がその後、研究領域を拡大させ、理論と方法という意味で自己開拓の努力を積みあげたのであった。他ならぬ荻村もその一人であったと言ってよい。荻村の言によると、学生時代の社会的関心は、村落共同体における入会地の問題であり、それがヨーロッパの村落社会へと広がり、ドイツ村落社会のマルクゲノッセンシャフトの研究へつながったという。これらは、後の服装社会学の展開とはかなり距離のあるものと受けとめられる可能性はあるが、前近代社会ないし近代化過程における村落共同体に見られる社会慣行と家族・親族集団の関係、それらの中で展開される人間関係とそれを支える社会規範などの問題は、近代化・大衆化の時代を迎える時の日本社会の観察と分析に比較論的視点を留意したことは間違いない。加えて、大衆化が進む高度経済成長期の日本社会と文化に潜む前近代性と近代性が、服装と服装文化を考察する際の重要ポイントのひとつになっている。因みに、荻村は、服装における「停滞性と流動化傾向」について述べる時、特に日本の家父長制家族や伝統的技術の継承、家事技術の中に留まる中での被服教育の後進性にふれるなど、かなり批判的立場での言説を披瀝しているが、この点などは、前述の戦後初期の社会学の問題意識との関係を物語る一例とって

よい。いずれにせよ、このような視点から、やがて日本の社会学界で展開される総合社会学から特殊社会学（社会学独自の研究課題にもとづく個別社会学としての特殊化）への動きとそれに関する論争、構造機能分析や大衆社会論ないし産業社会論などの流入、アメリカを中心とする文化人類学の諸潮流と社会心理学的言説などは、荻村のみならず、戦後初期の社会学者の研究的関心と方法に大きな影響を与えたと言ってよい。例えば荻村は、当初から着装観の形成や流行の取り入れに関する日本人の価値観と行動様式を考察するにあたり、F・ボアズに始まる文化人類学の一定の流れを採用するに積極的であった。特にR・ベネディクトの「文化の型」や「菊と刀」にみられる見解の援用するに熱心であった。周知の通り、「菊と刀」は、日本文化の型を研究した書であり、戦争終結後の日本統治と日本社会の民主化に向けて、R・ベネディクトを中心とする人々のいわば戦略論的研究でもあった。あまつさえその研究資料の役立て方は彼女がいかに精力的で緻密な研究を展開したと評価できるものを残したとしても大きな疑問を残すものであったこと、特に日本人として一読すれば批判的見解に立たざるをえない点が多いことも事実であり、その点で批判的な見解も少なくなかった。しかし、荻村がこれらの点を十分に理解したうえで敢えてR・ベネディクトの所論、特に「恥の文化」「罪の文化」の二項定立にこだわったのは、彼女が具体的に日本文化を研究したからということよりも「文化の型」という捉え方でいわばマクロな理解をする方式をとったことを評価したからに他ならないし、加えて「文化とパーソナリティ」や「文化相対主義」という文化と行動様式を検討する当時の枠組を評価する立場にあったからに他ならないだろう。事実、その評価にもとづく荻村のパーソナリティ論は、一定の文化の型に包まれた人々や集団の価値観と行動様式をパーソナリティと捉える立場であった。従って、パーソナリティに関して性格論の見解に立つ人々、ましてや社会心理学的立場の人々との間には、議

論のうえで常に平行線を辿るものとなった。そして、その後の荻村の文化人類学的関心は、A・クローバーやR・リントン、C・クラックホーンなどの所論を中心とするものとなった。特に、文化概念の選択とその後の服装との関係づけをめざすに当っては、C・クラックホーンの文化概念、R・リントンの価値態度体系などを援用した。

以上のように、荻村は自らの社会学の展開と服装社会学の構築という二つの主題のもとに、当時の社会学の激しいうねりの中に身をおきながら、文化人類学の一部ととの接点を確実にするという方法を見出したと言ってよいだろう。しかし、本格的な服装社会学の形成のためには、服装の起源（人はなぜ衣服を身につけるのか）や、元来、服装学と服装社会学はいかように関係づけられるべきか、整理すべき課題は少なくなかったのである。

### III 服装社会学の基盤

1960年代初期の社会学の潮流を視野に入れつつも、服装社会学への離陸のためには、若干の助走が必要であった。それらを要約すると以下の通りになろう。

- (1) 服装の起源
- (2) 服装をめぐる停滞性と流動性
- (3) 個人・行為・社会と服装
- (4) 服装学の独自性（いわゆる脱家政学ということ）
- (5) 服装学と服装社会学

荻村は、主として上記の項目について学内で講ずるとともに、所論や主張を論稿化する一方で、さまざまな識者へ訴え、直接、論議を交わした。

まず、服装の起源については、人類がどのような衣服をその知恵と工夫によって創出し、自然環境への適応を果たしてきたか、考古学的な証拠や美術史的な記録によって明らかにすることを提唱している。もちろん、これらの領域は、荻村の専門とするところではないので、緻密な

論理と検証を伴うものではない。むしろ、基本的に人はなぜ衣服を身につけるのかという服装学としての問いかけに自答することに努めたと言ってよい。荻村は、人間が衣服を身につけるのは、身体保護、生命維持の目的を達するためであり、そのまま、服装の身体保護、生命維持の機能と整理している。そして、しばしば指摘される羞恥説、呪術説については、必ずしも詳しくふれることをせず、社会制度の進化、文明の発達とともに、服装には、地位・身分の表示、社会的役割や職業の明示、その他階級的階層的要因の表示、そして自己顕示の欲求の充足などが重要な機能となるとする。いささか早足で、服装の社会的機能を重視する方向へ視点を転じたいとする意向が働いているようにさえ見受けられる。

次に、服装をめぐる停滞性と流動性については、1950年代後半以降の日本の社会的経済的状况の推移をみながら、以下のように整理している。(1)衣服は、身体保護、生命維持の機能を通じて、人間生活の基本的な枠の中に変化の少ないものとして固定される傾向がある。(2)衣服は身分や地位、性別や年齢、職業の別、さらに階層や階級の区分などを、明示するものと変化していくが、いったん社会体制の中に制度化されると、容易に変化しなくなってしまう。(3)衣服はしばしば民族文化の象徴となり、象徴としての服装は民族文化を代表しその特性を伝播する役割を担う。その点で文化の中に定着する服装は流動性を失う。(4)本来、衣服は個々人の生活に密着するものであるところから自給自足の性格が強い。そして、衣服製作の手工業的な技術は、一面において家庭裁縫として受けつがれている(いた)。また、家庭内労働の他に、職人技術者の熟練労働は伝統的服飾文化の継承という点で重要な意味をもち、美術的工芸的水準の高さを維持するものとなる一方、職人的技術の世界に閉じこめられる結果、変化に乏しいものとなる。(5)これらの傾向は、衣服製作の産業化という点ではブレーキとなり、衣服産業の近代化を遅らせた。(6)こ

れら衣服製作の技術や文化の流れを教育のレベルで継承し発展させるという意味で、被服教育はながらく家政教育の一環と考えられ、家事・裁縫の実務訓練に留まる一方、古い意味での女子教育の中に封じこめられ、変化しにくい性格をもったのである。

一方、服装は、社会的経済的構造変化によって加速度的に変化を顕著なものとするようになる。すなわち、服装には他面において流動化傾向が明らかに見られるようになる荻村は指摘する。

(1)科学技術の進歩により、衣服素材の改良と新素材の開発が進み、身体保護、生命維持の機能は、衣生活上の意識という点では減退した。また、空調設備の普及など生活環境の変化は、ますますその傾向を強くすることになったと言える。(2)その結果、服装の機能は社会的機能を強化する方向に向かう。但し、現代社会は、前近代的な地位・身分によるタテ型の人間関係を脱する傾向にあり、制度や身分の表現という側面は弱まる方向にある。(3)現代人の欲求は、細分化し多様化する傾向を強くするので、服装も個人の欲求や価値観にもとづいて個性化し、自己の存在を他者に認知させようとする自己顕示の欲求の充足をめざすものとなり流動化する。(4)かつて衣服は財産の一部と考えられ継承されていたが、現代社会では消費財とされるようになり、流動的で多様なものとなっている。(5)衣服は、家庭内労働や職人的な技術によって調達され継承されていたが、産業化の進展で繊維・アパレル産業界が衣生活の大部分を支えるようになった。産業界は新たな需要を創出しながら、生産—流通—消費のサイクルを形成し、ますます衣服を消費財化させ、服装の流動性を促したのである。

これら服装の流動化傾向は、そのまま服装を社会学的視座で捉えなおす必要性につながるものとなったことは間違いない。しかし、荻村にとって、それだけが服装社会学の成立要件となったという訳ではなかったようだ。それは、服装が、人間の欲求や行為、集団や地域社会、

文化や経済的営為など、社会学が広く「社会」と接点をもって構成するその諸領域との連携で捉えられねばならないという服装社会学の出発点としての基盤があったからである。荻村は、先述のように社会構造の変化と服装の変化とを結びつけて捉える一方、個人の欲求・心理、社会的行動（着装行動）との関係で服装を考察する方法も採用した。欲求・心理と括られるものは行動を促す要因であるとしながらも、大きくは心理学的領域としての枠組におくこととし、行動を社会的行為という捉え方にたって説明する立場をとった。特に、M・ヴェーバーの伝統的行為、感情的行為、目的合理的行為、価値合理的行為、いわゆる行為の四類型を出発点とすることが常であった。後に、人間の相互行為を通じた社会関係の中に服装ないし着装行動を捉える必要を説きA・カーディナーの所論を援用することもあった。この点は、先に述べた文化人類学の理論や南博などの社会心理学の説明概念を応用することに積極的であった荻村の姿勢によるものでもあった。

また、同世代の社会学者であった富永健一らの社会ないし社会関係の論理に共通するものを前提とした。つまり、社会には、相互行為ないしコミュニケーションが成立しており、持続的な社会関係が形成されており、一定の度合いでオーガナイズされており、成員と非成員の境界が確定しているものである。すなわち、社会は具体的には、家族や親族などの基礎集団、組織を伴う集団、農村や都市などの地域社会、群集、階層などの側面で観察できるものである。したがって、服装社会学は、これらの社会の中で服装・衣生活・服装文化などを考察するものでなければならない。

このような服装社会学の展開は、その前提に服装学の整備を伴うものでなければならないとするのが荻村の立場であった。

#### IV おわりに—服装学と服装社会学—

先にも述べた通り、荻村は服装に関する総合

的研究の必要性を説き、その全体的イメージの中に服装学を構築していたと思われる。それは、しばしば荻村が講演などで述べていたことでもあり、家政学と一線を画すこと（すなわち脱家政学）から始めなければならないとした。荻村によれば、家政学の中に位置づけられた被服学は、被服製作、意匠学、被服材料学、被服整理学、服装史などで構成され、現代社会の中で「服装」として捉えるには不十分であるとし、一方、家政学にとらわれない服装学は、きわめて学際的であり、人文、社会、自然の諸科学と広く接点をもたなければならないとする。そして、服装社会学は、服装学の社会科学領域の一分野としての役割を果たさなければならないということになる。

ただし、この段階での荻村は、服装に関わる社会科学領域と、その一分野としての服装社会学との区分の必要性を明らかにしていない。むしろ、社会学それ自体は、領域社会学としての文化社会学、経済社会学、産業社会学などを既に確立していること、また、社会心理学、文化人類学、民俗学などと研究領域を大幅に交叉させていることから、敢えて「服装の社会科学」を改めて設定する必要はないとしていたと思われる。しかし、その一方で従来の商品学、マーケティング論、消費者行動論などは服装・ファッションを確実に対象とするものに進化しなければならないとしばしば主張した。その点から考えれば、社会学以外の社会諸科学に立脚した服装・ファッション研究の必要性を認識しつつあったとみることもできる。特に服装社会学研究会やファッションビジネス学会などを通じた議論では、その点を次第に明らかにするようになったと言える。すなわち、経済学、経営学の観点からファッションを捉えようとする立場、ファッションのグローバル化やファッション市場の急激な変化に対する販売戦略、アパレル企業にみられるIT化などが明確になるにしたがい、社会学だけでは対応しきれない状況を認識すべきであると唱えるようになったのである。

いずれにせよ服装社会学のなかに社会学的領域の設定を試みる一方で、服装社会学の立脚点としての新しい服装学的环境整備の必要性を平行して力説したのが荻村の言説の特徴である。本稿では、基本的に、荻村の「服装学への道しるべー服装社会学入門ー」や他の論稿などに依拠しながら、服装社会学の草創期の考え方を振り返る作業に終始したが、その後の展開については、次稿に述べることにしたい。

#### 参 考 文 献 等

- 1) 荻村昭典,『服装学への道しるべー服装社会学入門ー』,文化出版局,1987
- 2) ルース・ベネディクト,『菊と刀』,長谷川松治訳,社会思想社,1967
- 3) ルース・ベネディクト,『文化の型』,米山俊直訳,講談社,2008
- 4) 富永健一,『戦後日本の社会学』,東京大学出版会,2004
- 5) 原尻英樹,『文化人類学の方法と歴史』,新幹社,2008
- 6) 濱田勝宏「現代社会と服装に関する一考察ー社会的アプローチの提案ー」,ファッションビジネス学会編『ファッションビジネス学会論文誌』Vol.1,1995
- 7) 濱田勝宏「現代社会と服装に関する一考察ー社会的アプローチの提案(2)ー」,ファッションビジネス学会編『ファッションビジネス学会論文誌』Vol.2,1996
- 8) 濱田勝宏「服装社会学研究の史的展開と今後の展望」,ファッションビジネス学会編『ファッションビジネス学会論文誌』Vol.11,2006
- 9) 井上忠司,『風俗の文化心理』世界思想社,1995
- 10) 佐藤健二・吉見俊哉編,『文化の社会学』,有斐閣,2007